

●中部ブロック記念講演 平成16年9月15日(水) ホテルキャッスルプラザ

## 情報技術と新しいオフィス

羽山明久 名古屋大学 助手



最近の流行という訳ではなく、ICタグ(チップ)、ペーパーディスプレイ、ロボットの三つに注目している。それぞれ情報と人間の仲介となる新しいカタチだからだ。これらは従来のそれとは比較にならない程に人間の側に擦り寄ってくる。

チップはあらゆるモノの中にその姿を隠し、ペーパーディスプレイは何千年という歴史の後継者をもくろみ、ロボットは人間になろうとさえしている。

こんなものが生活の中に入り込むと、そのスタイルはどう変わるだろうか。考えるだけでおもしろい。

### 情報化と生活空間の変化

昨年度の建築学会大会で、「情報化は人間の生活空間をどう変えるか」というテーマのもと、各分野の専門家の意見を聞く機会があり、私も事務局として関わった。

情報化による正負の影響と、生活空間の変化について意見を求めたのだが、果たして、意見はバラバラだった。「サイバード・スペース」「空間知能化」といった少し難しいキーワードを展開する積極的な意見や、「ホームオフィス」「遠隔医療」等の実例が挙げられるなか、「住まいの本質を見失ってはならない」という懐疑的な意見も散見された。否定的な意見としては、「情報化が進むと建築への影響は少なくなる」という見方に代表される。

意見はバラバラだったのだが、それぞれの違いは、視点をどこに置くかという差なのかもしれない。

おもしろいことに、「情報化が進むと社会や生活そのものが変わりますか」と質問の角度を少し変えると、例外なく「変わります」と意見の一致を

みている。

### 情報通信技術は都市を変える

十年近く前の話だが、仙台メディアテークのコンペを見て、衝撃を受けたのを覚えている。既の実現している伊東案もそうだが、ここで言いたいのは二等だった古谷誠章さんの方だ。

ご存知のように、このコンペでは、図書館やギャラリー、メディアセンター等が入る複合施設をどう表現するかが問われた。古谷先生は、それぞれを個別に扱うのではなく、融合させる案を提示した。

中でもおもしろいのが図書館のスペース。簡単に言えば、手にした本は建物内に散らばる書棚のどこに返してもよく、その所在はICチップによってサイバー的に管理するというもの。

利用者は本を手にとると自分の好みの場所を見つけて本を広げる。そして別の書棚に戻すということが繰り返されるうちに、ある分野の本がそれらに興味のある人々によってどこかに集まり、文化のようなものが生まれるのではないか、古谷先生はそういう提案をされた。

当時はただ漠然とだが、私はこういうものが情報通信技術による新しい建築なのではないかと感じた。

これはよく考えると、建築というより都市のあり方にとってもよく似ている。「まち」というのは、もちろん政策的なものでもあるが、この場所が好きだという人々によって特徴付けられるものでもある。こう考えると情報通信技術は、単体の建築よりも都市に与える影響の方がはるかに大きい。建築が「まち」を意識しなければならない理由がまた一つ増えたことになる。

### サロンと舞台、+ホームベース

未来のオフィスを考えるキーワードに少しだけ触れておく。

ある人は、「これからのオフィスはサロンと博物館だ」と言っている。サロンとは、ワーカーのための交流の場であり、仕事というよりも、インフォーマル・コミュニケーションの場だ。博物館は、情報発信や商品の展示の場である。私は博物館というよりも、むしろ舞台と言った方が近いかなと思う。静止したものではなく、躍動的に見せる舞台ではないかと。

実際のワークは建物の中でなくても良いのだから、オフィスはサロンと博物館だけになる、というわけだが、私はやはり、例えワーカーが外に散ったとしても、「本来の居場所」というホームベースとしての意味を共有する必要があると考える。組織や命令系統、さらには企業文化、そういうものがオフィスのなかに感じられるべきだと思うからだ。サロンにその役割まで期待するのは重いように思う。

百社あれば百通りのオアフィスが有り、これだという正解はない。オフィスを性格づけるのは情報通信技術ではなく、それぞれのワークスタイルであり、ワークスタイルは組織をも形づける。これらは常に一体なのだと思う。

確かなことは、これからのオフィスに必要な要素は「自由に選択できる」「応用できる」「変えられる」ということだ。

情報通信技術はそれだけが一人歩きするものではなく、そうしたカタチをサポートするために、必要にして不可欠なものとして獲得したいと思う。